
極楽鳥をさがして

なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極楽鳥をさがして

【Nコード】

N1922L

【作者名】

なつき

【あらすじ】

「極楽鳥を見に行こう」とミナモは言った。その提案は急すぎて、ぼくは何のことだかさっぱりわからなかった。「『つまり、今のわたし達にはこういうのが、必要なんじゃないかって、思ったわけね』」

極楽鳥をさがして

極楽鳥を見に行こう、とミナモは言った。その提案は急すぎて、ぼくは何のことだかさっぱりわからなかった。

「つまりね、」

昼休みももうすぐお終い、人気のなくなってきた廊下で、ぼくの右腕をぐいぐいと引っ張りながら、ミナモは早口で言う。

「つまり、今のわたし達にはこういうのが、必要なんじゃないかって、思ったわけね」

ちよっと待ってよ、とぼくは抗議する。

「もうすぐ五時間目が始まる」

「極楽鳥は、こういう日じゃないと出てこないんだよ」

まったくミナモのやることはいつも突発的だ。しかもわけがわからない。昔からそうだ。天の宝石をとりに行くだとか青いたぬきを捕まえに行くだとか、夢見たことを言ってはぼくを引っ張る。

「さぼるってこと？」

「？」名答」

「ぼくは授業に出たいんだけど」

ミナモは僕の腕を掴む力を強めた。

「シユウタのくせに生意気。黙ってついて来るんだよ」

こういうときのミナモは迫力がある。有無を言わせぬ口調で、はっきりと言い切るのだ。しかも情けないことに、中学一年生になった今でも、女子であるミナモのぼうが、男のぼくより身長が高い。ミナモは小学生のころからクラスでも大きいほうだったし、ぼくは小さなほうだった。

ミナモに逆らうとろくな結果にならないことを、というかそもそも逆らうことなどできないということを、ぼくは小学校の六年間で

よく学んでいる。自分の思い通りに行かないと、泣くわ暴れるわすごいのだ。こんなはちゃめちゃんな女の子につきあうことのできるやつなんて、ぼくくらいだろう。ぼくがいなかったら、誰がミナモの相手をするんだ。

そうして無理やり自分を納得させたとき、ぼくらは太陽のもとに出た。裏庭だった。目の前には木々が繁っている。自然のただなかにあるこの中学校は、小さな山に面しているのだ。

「ここに極楽鳥が出るんだよ」

ミナモがほくそ笑んだとき、きんこんかんこん、と間延びしたチャイムが鳴った。五時間めが始まるのだ。とろとろとした罪悪感が湧き上がってきたが、反面ぼくは安心もしていた。あの息の詰まる教室にいらなくていいと思うと、すごく開放的な気分になった。

初夏の日差しが照りつけ、足元にくつきりとした影をつくる。さあつと吹いた風が、湿った匂いを連れてくる。午前に降った雨は、土に染み込んでいるようだった。

ぼつりぼつりと言葉を交わしながら、ぼくらは山をのぼっていた。

「あ、どんぐりがある。秋の残りものかな、どう思う、シユウタ」
「多分、そうだと思う」

ぺた、ぺた、と土は音をたてる。ぼくの上履きの裏で潰れていく。その感触はむずむずと心地よかった。

緑の葉からは時折水滴がしたり落ちる。土は水気をたっぷり含んですこしねちゃねちゃしている。雨の痕跡は、確かに残っているようだった。

山、と呼ばれてはいるけれど、じっさいここは丘に近い。五分も歩けば、頂上に出してしまう。でもそんなこぢんまりとした山でも、木々はいっぱい葉を広げ、虫たちは土のうえを動きまわり、鳥たちが飛びまわるのを見てとれる。

葉が頭上でこすれるのを聞きながら、ぼくは一応尋ねた。

「極楽鳥って、なに？」

「んー、すつごくね、きれいなんだよ。羽をばって広げたときはね、カラフルで」

「あんまり説明になっていない気が、しなくもないんだけど」

ミナモは無視してずんずん進む。ぼくの腕を、しっかりと握りしめたまま。

極楽鳥というと、とぼくは思う。中国だかどこかの、そう、くじやくみみたいなイメージがある。くじやくなら小さいころ、動物園で見た。極楽鳥という名前は、それよりも色鮮やかな何かを連想させる。

極楽鳥についてあれこれ思いをめぐらせているうちに、急に太陽の光が差し込んできて、思わず目を細めた。頂上だ。

頂上はまっ平らで、短い草が生えている。中央には、何かのついでのように置かれた丸太のベンチがある。視界は開けていて、隣町にある市役所も見える。

ここは、告白スポットやカップルの居場所として有名な場所だ。ぼくは何となく、そわそわしてしまう。ミナモがぼくのことを、なんとというか、そういう意味で気にかけてたりしたら、どうしよう。右腕のぬくもりが、きゆうに気になる。ミナモの横顔を、ちらりと見る。やっぱり大柄な体格だ。そのぶん発育がいいのか、胸が大きい、と思う。こうしてみると、結構ミナモも、悪くない……。

そこまで考えたところで、ミナモはぱつとぼくの手を離れた。湿気を帯びた空気がじかに肌に触れる。

ミナモは手をおでこのところにかざして、きよるきよると辺りを見回していた。あれえ、と不服そうな声を出す。

「いないな、極楽鳥。まだどっかで休んでんのかな」

「休むもんなんだ、極楽鳥は」

「そりゃあ、鳥だからね」

何故か誇らしげに言っつて、ミナモは丸太のベンチに腰を下ろした。すこしの距離を開けて、ぼくも隣に座る。

「待ってよう」

ぼくは頷く。

しばらく風の音を聴いていた。頂上に吹く風は、地上のそれよりも、爽やかで、湿っぽくて、野性的だ。

「あたしさあ」

ミナモがぼつりと切り出した。

「中学校ってさ、こう、もっとわくわくするような、そんな場所だと思ってたのね。ほら、よく小説とかだと、みんな冒険してるし、でも、……案外そうでもないのね」

突然言われて、どう返していいかわからなかった。視線を地面のほうにやっけて、うん、と言うしかなかった。

「授業は退屈だし、クラスメイトは何だか、くだらないし。あたしが赤い竜や美人な人魚をさがしに行っただって言っても、みんな笑い飛ばすだけなわけ。夢がないよね」

ぼくは何も言えなかった。ミナモがそういう幻想に、本気で憧れていることを知っていたから。

地面に生えた、背の低い雑草は濡れている。水滴が短い葉に重そうだ。

「……わかってるわけ、あたしもじつは、心のどっかでは。あたしは、夢見てるんだって……ねえ、どう？ シュウタもやっぱり、そう思う？」

ぼくは今度こそ、何も言うことができなかった。ミナモに対する思いなら、この胸にいっぱいある。でも気恥ずかしくて、ミナモに悪くて、言葉にはできない。

ミナモは、クラスで浮いている。ミナモと同じクラスのやつから、そういう話をよく聞く。小学校のときは、空想的な話をせがまれて人気者だったミナモは、中学校では受け入れられなかった。みんなすこしずつ、大人びてしまったのだろう。

ミナモは、あはは、とかわいそうなくらい明るい声で笑った。

「みんなこうして、現実主義者になっていくわけです」

現実主義者、と声に出さずに反芻する。その硬い響きは、ぼくをひんやりとした気もちにさせた。

あーあ、極楽鳥まだかなあ、とミナモは足をぶらぶらさせる。きつとミナモは無理している。でもぼくはどうしていいかわからない。どうにかしたいけれど、どうにもできない。

ぼくはミナモに何も言えない立場だ。ぼくだって多分、ミナモの言う現実主義者になりつつある。背が小さいぶん、なめられないようにぼくは努力しなければならぬ。からかわれないように、貶められないように、誰かをからかい、貶める日々がつづいている。そんな毎日につんざりすることもあるけれど、でも、苛められているやつを見ては思う。自分はこうはなりたくない、と。自分を守るために、ぼくは今日も人を傷つけているのだ。ミナモと仲のいいことだって、クラスではいつも、否定している。

「でもね、極楽鳥はいるよ」

決然とした声で、ミナモは言った。

「極楽鳥はいる。これはほんとうだよ」

ミナモは繰り返した。

ぼくは、そうだね、と柔らかい声をつくって返した。ミナモへの、せめてもの優しさだと思って。それは残酷な優しさなのかもしれないけれど。

ぼくはミナモの言うことなんか、信じちゃいなかった。

天の宝石も青いたぬきも赤い竜も美人の人魚も、この世のどこにもいない。そんなの当たり前前で、暴走する幼なじみを、傍らで苦笑して眺めていた。心のおくでは呆れながら。

極楽鳥って聞いたときも、ああまたミナモの妄想か、くらいにしか思っていなかった。

でも極楽鳥は、ほんとうにいた。

それはふいにあらわれた。

はるか遠くに、しかし、くつきりと。

「極楽鳥だ！ ほらシユウタ、あれが！」

七色に半円を描くそれは、虹だった。鮮やかな七色が揃い、鮮やかに描かれた。

「つまりね、みんなが気がつかないだけなわけ。あれは極楽鳥だよ。誰が何と言おうと」

そうか、とぼくはすっと腑に落ちた。

ミナモにとつて、虹は極楽鳥に見えるのだ。ミナモはきつと、世界を独特な見かたで見ているんだ。天の宝石や青いためきや極楽鳥は、ミナモのなかには確かに存在するものなのだろう。

「どうして、鳥？」

「だって、あのかたち。羽の骨格に見えるじゃない。極楽鳥の羽なのよ、あれ。極楽鳥は、もう、すごい大きいわけ」

そうまくしたてるミナモの瞳はきらきらと輝いて、とても幸せそうだった。宝ものを見つけた子供のよう。

「ミナモさ、絵本作家にでもなりなよ」

「絵本作家？」

「うん。きつと向いてる」

現実主義者になりきれないミナモには、と心のなかでつけ足す。

ミナモは振り向き、そうかな、と笑った。

そのうしろでは、澄んだ青空を背景に極楽鳥が翼を広げている。

ぼくはそれを、きれいだな、と感じた。ずいぶん久々に、混じりけない気もちで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1922/>

極楽鳥をさがして

2010年10月8日15時22分発行